



笠谷和比古 国際日本文化研究センター教授

1949年兵庫県生まれ、京都大学文学部卒、京都大学大学院文学研究科博士課程修了。

●はじめに

本書では日本史上の一大画期をなした関ヶ原合戦と、同合戦において大きな役割を果たした直江兼続を主題として取上げています。

これまで関ヶ原合戦については、その勝利によって徳川家康の覇権が確立し、徳川幕府260年余の支配にとって磐石の基礎が築かれたとする評価が一般に行なわれてきました。しかしながら、これは大いに疑問としなければなりません。

それは合戦後における全国的な領地配置図をみれば、おのずと湧き起こってくる問題です。家康と徳川勢力が獲得した領地は陸奥の磐城平から関東・東海を経て近江国に至る地帯に分布しますが、しかしそれにとどまっています。北陸地方も越前国のみです。日本全国の三分の一でしかありません。それ以外は、すべて外様大名の領地なのです。

こと京都以西の西国地方は、すべて外様大名の領地であり、しかもそのうちの八割が豊臣系大名たちの領地というのが実情です。これをもって徳川幕府の磐石の態勢などとは到底言うことができないでしょう。関ヶ原合戦の意義が根本的に問い直されなければならないのです。

本書では、同合戦の意味を、そこで大きな意味を果たした直江兼続とのかかわりの中で捉えていきます。関ヶ原の合戦が、それに先立つ豊臣政権の構造的な矛盾の発現であったごとく、本書では直江兼続が上杉家の執政として成長し、豊臣政権とのかかわりを持つようになった時代までさかのぼって見ていきたいと思います。

●目次

第一回	関ヶ原合戦とは何か？	3月31日放送、翌日再放送
第二回	直江兼続の人となり	4月07日放送、翌日再放送
第三回	信長・秀吉と越後上杉家	4月14日放送、翌日再放送
第四回	秀吉死後における豊臣政権の分裂	4月21日放送、翌日再放送
第五回	「直江状」と家康の会津出征	4月26日放送、翌日再放送
第六回	石田三成と直江兼続	5月05日放送、翌日再放送
第七回	小山の評定と家康方東軍の混迷	5月12日放送、翌日再放送
第八回	会津上杉家をめぐる攻防	5月19日放送、翌日再放送
第九回	直江兼続の最上攻略作戦	5月26日放送、翌日再放送
第十回	家康の江戸出陣と徳川秀忠の遅れ	6月02日放送、翌日再放送
第十一回	関ヶ原合戦	6月09日放送、翌日再放送
第十二回	上杉家の米沢移封と直江兼続	6月16日放送、翌日再放送
第十三回	関ヶ原合戦と徳川幕藩体制	6月23日放送、翌日再放送

ということで、放送は完了しています。

NHK大河ドラマ『[天地人](#)』は2009年一杯放映中で、[直江兼続](#)が主人公のようです。

この『[天地人](#)』に所縁ある、[春日山城址](#)（「[なえな小屋](#)」が建っている妙高の地に程近い）、そして[坂戸城のあった南魚沼市](#)を訪ねる機会に恵まれたので、今回このような特集を組みました。



春日山に向かうYWVOBメンバー



春日山本丸で歓談するYWVOBメンバー

1. 兼続の出目と生き立ち

天下分け目の関ヶ原合戦で立役者の一人となる直江兼続が生まれたのは永禄三（1560）年、有名な桶狭間の戦いがあった年である。このことは兼続が、戦国時代から天下一統の時代にいたる歴史年表の中で、どのような位置にあるかを非常に分かり易くしてくれている。

兼統は樋口惣右衛門の嫡男として生まれた。幼名を与六という。父兼豊は上田庄に位置する**坂戸城（南魚沼市）**の城主長尾政景の重臣で、この当時は勘定方の奉行を務めていた。母は、兼統がのちに家督を継ぐことになる直江家の出目（直江景綱の妹）とされているが根拠にとぼしく、史家の渡邊三省氏は『上田士籍』などの史料に基づいて、彼女を信濃国の武士泉弥七郎重蔵の女子と考証されている。従うべき見解であろう。（渡邊三省氏の『正伝直江兼統』）。

樋口家は、古く源平合戦時代に活躍した木曾義仲の四天王の一人として知られる樋口次郎兼光の末裔であると称している。真偽の程は定かではないけれども、この家の人々は、兼統も含めて「兼」という字を通字としている。

父の兼豊、祖父の兼村、そして兼統に代わって樋口家を嗣いだ三男の秀兼と、いずれもこの通字を用いている。このあたりのところからも、樋口兼光の子孫という意識はかなり強かったと考えていだろう。

さて幼い樋口与六は父に従って坂戸のお城務めの見習いに励んでいたが、城主政景の室仙桃院（上杉謙信の姉）の目にとまり、政景の跡取り息子である喜平次景勝の近習に取り立てられた。

景勝は弘治元（1555）年11月の生まれ、この頃は長尾喜平次顕景と名乗っていた。景勝は兼統より五歳の年長であり、両者の歳の頃合いもよろしく、樋口の家柄も家臣中においてはまずは申し分のないという考慮も当然あったろうが、幼い与六には「容貌閑麗にて、その稟賦大度の器」（『北越軍談』）という雰囲気をもたせていたことも、この人選には預かって力があつたことであろう。ともあれ、これより二人は終生にわたって主従の絆で固く結ばれることになる。

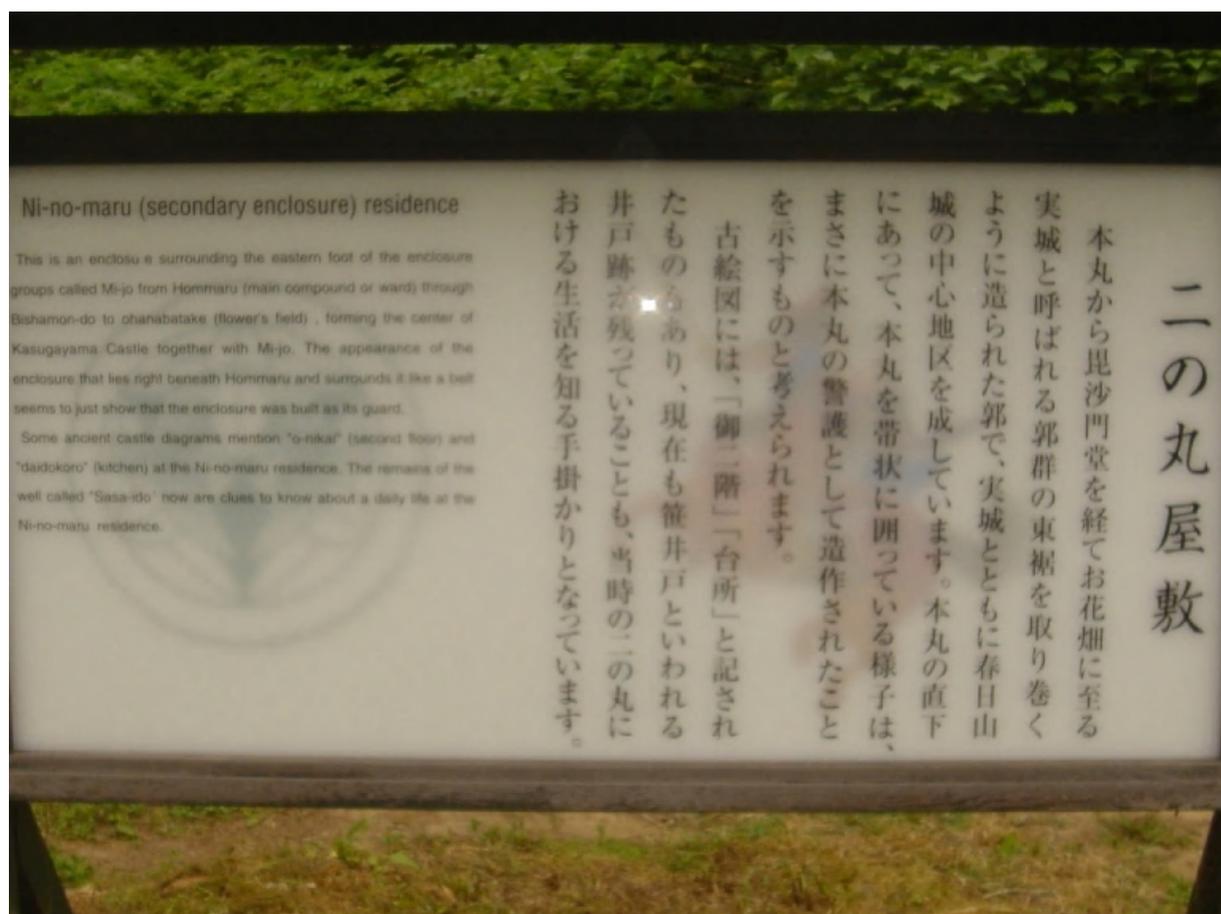
兼統が景勝に仕えることになった少し前のこと、景勝と兼統二人のその後の境遇に大きな影響を与えることになった野尻池事件というのがある。永禄七（1564）年七月のこと、景勝の父坂戸城主長尾政景のもとに上杉謙信（この当時は、長尾景虎の名。本書では便宜的に上杉謙信の名で記す）の老臣宇佐美定満が訪れ、二人は近くの野尻池で納涼の船遊びをしていた。ところが突如、船上で異変が発生し、政景と定満が相争ったのち二人とも水没して溺死したという事件である。これを池畔で見ていた両者の従者たちは斬り合いの乱闘騒ぎとなり、宇佐美方の従者が政景の子義景と景勝二人を拉致して立て籠もりの挙に出たことから、事件は容易ならぬ事態となった。

結局、騒動は謙信の下から派遣された兵士たちによって鎮圧されたものの、上杉家中に深い傷跡を残す出来事となった。事件の真相は不明のままのうちに過ぎ、上杉家中でもこの事件は語るのを躊躇う風が見られた。政景が小田原北条に内通したので、宇佐美がわが身を犠牲にしてあえて刺し違えの挙に出たものかという見方もあるが、他方では《おおかた謙信の内意にある事、粗ぼ知れる故、仙桃院、謙信に向かひて、越前殿（政景）果てられしは、偏に戦場にて御用に立ち候同様問》（『北越耆談』）、遺児らをお見捨てあるまじと語った由である。

この叙述によると、この事件は長尾政景が謙信の内命を受けて討ったという理解になる。仙桃院が政景の死をもって、戦場で御用に立ったのと同様と主張していることがそれを平仄が合しているし、何よりもこの事件では喧嘩両成敗の扱いを受けず、宇佐美家が城地没収、断絶の処分を受けているのに対して、政景の遺跡はとどこおりなく遺児らに相続せしめられているからである。謙信の信頼厚く、上杉家の武名高揚に多大の功績があった宇佐美であるが、晩年、謙信から疎まれるところがあったのであろうか。

さて景勝であるが、父政景の急死にともなって**坂戸城**は**春日山**から派遣された者が城将として置かれた。これは政景の遺児が、軍事を司るにはまだ幼かったことによるものである。

そして天正二（1574）年になって景勝は**坂戸城**を出て**春日山**に移ることになり、兼統もまたこれに従った。景勝が**春日山城**に移ったのは謙信の養子という含みで迎えられたことにより、彼はこれより**春日山三の丸**に居して「御中城様」と呼ばれることになる。なおこの時、景勝には**坂戸城**から五十騎組および槍長柄組三十人も同道しており、これらは上田衆と呼ばれる景勝の直臣団を構成していた。



この**春日山の二の丸**には、いまひとり謙信の養子と目される人物がいた。小田原北条家の四代目氏政の弟で、初め氏秀と称し、のちに景虎と改めた。上杉と北条との融和を目的として送られてきた人質に他ならないが、戦国の世ではかれら人質は大切に遇され、その家の養子としての身分をうけることも稀ではなかった。しかも謙信の初名である「景虎」をもらっ

ていたことから、景勝に比してこちらの方が謙信の嗣子としての資格は優先していたようにも見える。この両者が謙信の後継をめぐる「御館の乱」については後述する。

さて兼統は春日山城に移り住んでからは景勝とともに過ごす日々であったが、景勝の母仙桃院は謙信の実姉であったところから、仙桃院の使いで本丸の謙信のもとを訪れることもしばしばであり、利発で文事に通じているこの若者は、これまた好学の武将として知られる謙信の目にいつしかとまることとなる。謙信はこの与六兼統に着目し、景勝の将来を託す補佐の臣と見込んで、その訓育に努めることとなる。

謙信は兼統に城内の書庫を自由に閲覧することを許し、儒者や学僧らの講義のある際にもその聴聞の機会を設けてやるなどの心配りをしていたが、そのうちに謙信は姉仙桃院に請うて兼統を自己の近習にもらいうけ、自身の側に置いて彼を育てあげたいと考えた。こうして凶らずも兼統は上杉謙信の直下にあって、その薫陶を受けつつ成長することになる。謙信はその後、天正六年三月に突如倒れ、そのまま帰らぬ人となる。兼統が謙信のもとにあったのは三年ほどの期間となるが、謙信晩年の武将としての円熟した境地を、兼統は目のあたりにして学ぶこととなる。特に信義を重んじる行動というのが謙信の真骨頂であるが、毘沙門天信仰を背景としたその行動理念と、現実の戦の場における出处進退の具体的な振る舞い、この戦国時代を代表する名将の文武両道にわたる実物教育を直接に受ける機会に恵まれたことは、兼統にとって大いなる資産となったに違いない。

2. 越後上杉家と上杉謙信 略

3. 御館の乱 略